外部評価結果総括表

事業所名	せんねん村グループホーム矢曽根せんりょう・まんりょう
評価確定日	2007年3月31日
評価機関名	特定非営利活動法人HEART TO HEART

Ⅰ 運営理念

領域	評価項目数	できている項目数	改善が必要な項目数	判断が不能な項目数
運営理念・運営理念の啓発	3	3	0	0

特記事項

法人全体の理念「こころのびのび、からだいきいき、いのちきらきら」のもと「村人さんの個性を大切にします」「遊びをいっぱいとりいれます」「自立のお手伝い」「瞬間を大切にします」を基本の方針とし、さらに「これまでの人生いろいろあったけど、ここで暮らした日々が一番良かったよ・・そう思っていただけるホームであり続けます」とホーム独自の方針を定めている。入居者の視点に立ち、入居者がどんな生活ができるか、その人らしく生活できるように支えていく介護を職員自ら気づく事を大切にしている。管理者として、全てを伝えるのでなく気が付かないときは、ミーティング・現場で、提案をして職員が考えながら動く形を取っている。

Ⅱ 生活空間づくり

領域	評価項目数	できている項目数	改善が必要な項目数	判断が不能な項目数
家庭的な生活環境づくり	4	4	0	0
心身の状態に合わせた生活空間づくり	6	6	0	0

特記事項

玄関入り口上に天然木の表札を掲げ、せんりょう・まんりょうと分るようにしてる。玄関や居室の引き戸も天然木を使用し、木のぬくもりを大切にしている。建物中央がテラスになっており、居間から自由に出入りができて、テラスを通じて入居者が、自由にユニット間を移動できる。テラスには、家族が持ち込んだ花のプランターが置いてある。入居者は、ベッド・箪笥・椅子等家具を自由に持ち込み、自作の書や絵画を飾ったり、花・ぬいぐるみ・家族写真・本・日記等の持込をしている。押しぐるまの上や歩行器に籠を取り付けて、食器を自ら下膳できる方法を入居者と話し合いできる事を決めている。

Ⅲ ケアサービス

領域		評価項目数	できている項目数	改善が必要な項目数	判断が不能な項目数
ケアマネジメント		7	7	0	0
ホーム内でのくらしの支援	介護の基本の実行	7	7	0	0
	日常生活行為の支援	9	9	0	0
	生活支援・ホーム内生活拡充支援	2	2	0	0
	医療・健康支援	7	7	0	0

特記事項

介護計画は、センター方式を一部取り入れ、「できること」「できないこと」に目を向けアセスメントしケアのポイントをたて作成している。介護記録の表紙にはさみ、いつでも確認できるようにし、気づいた職員が、モニタリングし書き込み、それを基に3ヶ月に1回サービス担当者会議を行い、本人・家族に参加を促し、9割の家族が参加している。個人記録は分りやすいように、受診記録は緑、特変記録は青で記入している。嚥下に問題のある方には、介護職員が作る料理では限界があるため、母体のフードサービス部へ温柔食を依頼し提供している。ライフレビューブック(自分史)を活用して、なじみの飲食店、トラック運転手にはドライブ、コーヒーの好きな方は喫茶店に出かけたり、習字、生け花、編み物、踊りなど支援している。外には、籐製の乳母車があり、ゴミを入れて、入居者と一緒にごみ出しに出かけている。医療連携体制は、看護師が週2回勤務し、せんねん村の看護師と24時間連携をとる体制を整えている。主治医と連携をとり2件の終末期の介護を経験している。予測される事態を看護師から聞きながら、看護師がたてた終末期のケアプランをもとに看取りの介護に望んでいる。現在酸素濃縮器を使用している終末期の介護を行っているが、今回は訪問看護の導入も検討している。

Ⅳ 運営体制

領域	評価項目数	できている項目数	改善が必要な項目数	判断が不能な項目数
内部の運営体制	11	10	1	0
情報・相談・苦情	2	2	0	0
ホームと家族との交流	3	3	0	0
ホームと地域との交流	5	4	0	1

特記事項

法人代表は、運営に関して事務長を通し、現場管理者に任せている。情報交換は日常的にはパソコンメールで行い、月に1回各部署の代表者会議で法人全体の運営について報告や意見交換を行っている。2ユニットの管理者であるため、現在サブリーダーを育てている。2ヶ月に1回、町内会長、市職員、法人職員、家族10名前後で運営推進会議を実施している。意見を聞く事で地域の行事が分り参加しやすくなったり、ホームの環境や気づいた事を聞く事で改善点や課題がわかるようになった。4年目に入り、町内の方が入居されたり、散歩途中に、世間話をすることが多くなったり、近所の方が時々野菜を持ってきてくれるようになった。地域の商店街(酒屋、だんご屋、電気屋)と顔なじみになってきた。地域への還元として、公民館を活用して地域への認知症についての学習会を企画検討したり、地域の人が参加しやすいようなイベントを企画するとしている。

講評(全体を通して)

ホームは、特別養護施設せんねん村を母体としてH.16年4月開設し今年で運営4年目に入る。母体法人は他にケアハウス・通所・ショート・訪問介護・宅老所・H.17年開設グループホーム「吉良荘」を運営し、パソコンネットワークで連携している。開設1年目で管理者交代があり、現管理者は2代目である。管理者は、新しいホームのカラーを作るための改善を重ね、家族からは親しみやすくなったとの声がある。昨年、最初のターミナルが発生した時、管理者は近隣福祉系大学の「終末事例研究会」に参加、ホームとしての指針、マニュアルづくり、職員の指導をし、ホームは2人の看取りを行った。現在3例目のターミナルケアを実施し、ホームとしての自信に繋がっている。管理者は、理念の実現に向け一生懸命取り組んでいる。職員は、看取りを通して心の変容(不安、怖さ→看取れて良かった)を体験し力をつける一方、対応困難なケースなどへの対応などで精一杯となっている現状もある。利用者本位のために取り組む場合にも、職員チームの能力に応じてやりきれない場合もあってよく、職員が弱音や本音を言える関係性をさらに深めていってほしい。職場の意見交換の体制が充実した法人で、管理者もよく法人と相談をしているが、法人の職場リーダーへのスーパービジョンのさらなる拡充を期待したい。昨年度外部評価指摘の地域との交流は、運営推進会議が始まったこともあり、独自で関係を深める取り組みをしている。今年オープンする大型スーパーの説明会に参加する機会があり、障害者用駐車場の位置について助言をしたところ、変更つながるなど地域の高齢者・障害者が暮らしやすい環境作りへ地域協力できる関係も育てきている。